

学校の教育目標：やさしく かよく たくま

経営方針：心の宝物が輝く学校



かきさ TEAMら

令和 3 年度
笠原小学校
学校便り
1 月 28 日号

児童会：笑顔と優しさであふれるあたたかい学校にしよう

分団登下校は宝物

校長 鈴木 稔朗

節分が近づいてきました。それを心待ちにしているせいでしょうか、厳しかった冷え込みもほんの少し緩んできたように感じます。それでも身の縮むような冷氣の中、授業に、遊びに、掃除に、笠原小学校の子どもたちは元気に取り組んでいます。

3 日間、週末を含むと 5 日間。学級閉鎖を継続したクラスについては 1 週間。長い長い臨時休業を行いました。感染予防のためとはいえ、その間子どもたちの心身にも、そうして保護者の皆様の心身にも、とても大きなご負担をおかけしました。お勤め先との調整、学童保育も休所となる状況で、低学年の児童については在宅を見守るためのご手配。きっと途方に暮れられたことと存じます。心よりお詫び申し上げますと共に、ご尽力に心よりお礼申し上げます。おかげさまで、ようやく通常の学校生活が戻って参りました。今後ともチーム笠原として、感染予防に、関係者全員の笑顔と成長を守り切る取り組みを続けて参りたいと存じます。ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

小学校では、登下校中のトラブルが本当によく起こります。自分や仲間に優しさのアンテナを向け、した方がよい言葉や行動を選び取る力の豊かな本校の児童の間でも、それは例外ではありません。月に何度かは放送をかけ、休み時間に、トラブル解決のための分団会を開催しています。

誤解を恐れずに言えば、これは、ごく自然なことで、起こって当たり前、この先も決してなくならないことです。それは、登下校が、家庭生活と学校生活のちょうど中間に位置するからです。

児童には、それぞれの家庭内では、そのお家の子どもとして、家族としての明確な立ち位置があります。登校すれば、やはり「学校モード」のスイッチが入り、学級や自分の係、委員会を通して、「心の宝物が輝く笠原小学校」の一員として、考えたり行動したりしてくれています。

登下校は、そのどちらもゆるやかです。約束はあるものの、大人の目が届きにくく、自分の言動や立ち位置を自分で決められる時間です。いたずら心、わがまま、折り合えなさといった、学校や家庭では比較的抑えられているそれぞれの感情や行動が、よくも悪くも正直に出やすい、解放的な環境なのです。悪く言えば無法状態に陥りやすい。しかし、私はそうでなく、登下校の場と時間は、児童にとって宝物の山だと考えています。この時間に起こる、すなわち児童が経験するできごとをどうとらえ生かすかで、児童がその身に付けられる力は、ずいぶん違ってくと確信するからです。

私を含め、遠い昭和の子どもたちは、学校から帰った後の広場や河原の遊びで、多くのことを学びました。ドラえもんこそいませんでしたが、のび太もスネ夫もジャイアンもいました。けんかの後味の悪さ、仲直りしたときの安堵と見上げた空の青さ、年下の子を泣かせてしまった夜の自己嫌悪、体力や器用さに欠ける子には、加減や配慮をした方が、結局みんなが楽しいこと、「ぜっこー!(絶交)」と告げられたときの悲しさと、しかし、そうして少しの間距離を取ることも、お互いに自分を見直し、折り合う一つの方法であること。

世相の変化や少子化で、帰宅後の集団遊びは難しくなりました。ならばせめて登下校の時間を、「児童が素の自分を出して経験する事々を成長の糧とできる機会」として見守りたいと願います。

令和 4 年度、笠原小学校は「自立力と共生力」の育成を教育活動の核とします。そうして「登下校のトラブルもまた宝物」という認識で、分団登下校を大切な育ちの機会として捉え、見守り、指導して参ります。保護者の皆様にも共にその場を支えていただけるよう心から願います。そのためにもどうか、できるだけ送迎を控え、歩くようご指導ください。やむを得ない事情はその限りではありませんが極力、時に心を鬼にして。大切なお子様に、耐える力を培うために、その先に、ちがう景色があることを可憐な魂が感じるために、辛さをその身の内に抱える時間をあえて課すこともまた、真にその子の成長を祈る、深い愛情そのものであると信じます。